



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 1999, 82: 100-116

ISSUE DATE:

1999-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48531>

RIGHT:

彙 報

1998年（平成10年）1月～1998年（平成10年）12月

研 究 状 況

I 班 研 究

日 本 部

日・中・朝間の相互認識と誤解の表象

J・フォーゲル
班長 山室 信一

日本・中国・朝鮮の三国間には隣接した政治社会として相互の位置づけをめぐる認識上のギャップが存在し、それが時に政治的対立そのものの要因となってきた。もちろん、その背景には様々な事情があり、これを解消することは容易ではない。そうした認識ギャップや誤解が、いかに歴史的に形成され、いかに反復・伝承されてきたか、を洗い出し、その克服の方途を探ることは今日いっそう必要となってきた。本研究では自民族中心主義そのものを前提としつつ、新たな民族間の相互認識をいかにして創出しようかという問題意識に立って試行的議論を重ねてきた。しかしながら問題の性格上、研究班内での議論を、当該地域や異なった地域に住む研究者の見解とつぎ合わせてみるのが不可欠であることは研究会発足時から認識されており、国際シンポジウムの開催を前提とする試行的共同研究として運営された点に、この共同研究の特色があった。その国際シンポジウムを、8ヶ国40名の参加を得て開催した。その後、シンポジウムにおける討議の取りまとめの作業を各セッションの司会者に進めてもらい、討議集を京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊の第1号として刊行する準備を行なった。

班員 飛鳥井雅道 岩井茂樹 落合弘樹 籠谷直人 小林博行 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安田敏朗 山本有造（以上所内）河田悌一 陶 徳民（以上関西大）石川禎浩

季 衛東（以上神戸大）西村成雄（大阪外大）呉宏明（精華大）文 京洙（立命館大）齋藤希史（奈良女子大）藤永 壮（大阪産大）安富 歩（名古屋大）服部龍二（千葉大）

帝国の研究

班長 山本 有造

冷戦の終了、ソ連邦の崩壊とともに、諸民族・諸地域の間には遠心力が強まり、民族とは何か、国家とは何かがいま新たに問われはじめている。「民族自決に立脚した国民国家」という近代的理念の妥当性が再検討されるなかで、「帝国」という国家統合のあり方についても、改めて科学的分析が要求されつつある。

われわれの共同研究会においては、これまでの「マルクス主義的経済帝国主義」論にとらわれることなく、世界史的かつ長期的な比較の立場に立って、「帝国」の原理と類型を整理・検討しようとする。

研究会は原則として隔週月曜日に開催し、平均2つの報告と討論を行っている。なお、とりあえずは2年間をもって研究会を終了し、研究報告を刊行する予定である。

班員 籠谷直人 小牧幸代 水野直樹 山室信一 安田敏朗（以上所内）杉山正明（文学研究科）秋田茂（大阪外大）今田秀作（和歌山大）王 柯（神戸大）北川勝彦（関西大）杉原 薫（大阪大）山本正（大阪経済大）

4月13日 打ち合わせ

4月27日 報告 イギリスにおける帝国史研究の動向 秋田 茂
書評 濱下武志『朝貢システムと近代アジア』岩波書店 籠谷直人

5月11日 報告 両大戦間期における日本—アフリカ通商関係史の諸問題 北川勝彦
報告 アフリカの植民地化と「帝国意識」 北川勝彦

- 5月25日 報告 近代日本の言語認識における帝
国的側面 安田敏朗
論評 高橋彰「アメリカ史における帝
国と帝国主義」 山本有造
- 6月8日 報告 British History と帝国史 班長 横山 俊夫
山本 正
報告 環境史から見た帝国 杉原 薫
6月22日 報告 フランス帝国史及び帝国主義研
究をめぐる研究動向
ゲスト・大阪大 杉本淑彦
報告 植民地インドにおける綿花開発
とナショナリスト歴史理論 今田秀作
- 7月13日 報告 帝国の連続性と非連続性—唐と
遼を通じて見た中華の国家と民族—
王 柯
書評 木畑洋一『支配の代償』東京大
学出版会 籠谷直人
- 9月14日 報告 インド綿花開発と植民地支配
今田秀作
書評 アラン・パーマー『オスマン帝
国衰亡史』中央公論社 小牧幸代
- 9月28日 報告 The Future of the Imperial past
ゲスト・ケンブリッジ大
A. G. Hopkins
- 10月12日 報告 「帝国」にかかわる閑話三題
杉山正明
紹介 ピーター・ドウス、小林英夫編
『帝国という幻想—「大東亜共栄圏」
の思想と現実—』青木書店 山室信一
- 10月26日 報告 1930年代から40年代初頭の東南
アジア華僑通商網と日本 籠谷直人
書評 『岩波講座世界歴史5 帝国と
支配』岩波書店 秋田 茂
- 11月9日 報告 ムガル帝国をめぐる最近の諸研
究から ゲスト・東方部 眞下裕之
報告 『帝国』における植民地住民の
移動・移住—西成田豊『「帝国」国家
と在日朝鮮人の「世界」』（東京大学出
版会）にふれて 水野直樹
- 12月14日 報告 近代における帝国の構成と「国
民帝国」 山室信一
報告 『1930年代アジア国際秩序』（溪
水社）についての論点 籠谷直人／秋田 茂
- 言語力の諸相についての試行的研究
自然や社会とのかかわりにおいて、言語が力を持
つとは、どういうことか。おもに、日本や中国の話
し言葉や書き言葉の事例をとりあげながら、この課
題の検討を試み、総合研究の可能性を探ってみた。
一年限りの予備研究ながら、学内教育改善推進費に
よるセミナー「新発見事物への名づけをめぐる学内
共同のこころみ」（事務局当研究所）とも連携をは
かり、現代自然科学の専門語の流通力の狭さという
問題にも視野をひろげた。
- 班員 金 文京 小林博行 武田時昌 東郷俊宏
フィリップ・ハリス（以上所内）加藤和人（JT 生
命誌研究館）後藤静夫（国立文楽劇場）齋藤希史
（奈良女子大）田中貴子（京都精華大）深澤一幸
（大阪大）
- 1月24日 古今和歌集仮名序「そもそも、歌の
様」～「え有るまじき事になむ」後藤
活字とことば
ゲスト・九州大学 鈴木広光
- 2月7日 古今和歌集仮名序「今の世中、色に付
き」～「心を慰めける」 田中
モノを圍繞するコトバ —漢賦から六
朝詠物詩まで— 齋藤
- 2月21日 古今和歌集仮名序「古より、かく伝は
る内にも」～「入れず」 深澤
古典国文学における「性」をめぐる
一女の言葉と男の言葉 田中
- 3月7日 古今和歌集仮名序「その外に、近き世
に」～「知らぬなるべし」 金
和歌のレトリックと英詩のレトリック
ハリス
- 3月9,10日 八重山歌謡の多面媒介性を考える—
講演と実演（於京大会館）
ゲスト・琉球大学 山里純一
八重山芸能研究会
- 4月29日 城南宮曲水宴・壬生狂言鑑賞 全員
- 5月9日 樋口一葉「たけくらべ」幸田弘子氏朗
読会 全員

- 琉大八重芸の八重山歌謡伝承を考える 班員 籠谷直人 高木博志 タカシ・フジタニ
後藤 安田敏朗 山室信一（以上所内）金 慶南（外国人
5月23日 故福井謙一博士手稿類閲覧（於京大総 共同研究者）伊藤之雄（法学部）永井 和（文学
合博物館） 全員 部）堀 和生（経済学部）青野正明（聖和大）浅井
名付けと言語力—覚え書き風に—横山 良純（大阪経済大非常勤）桂川光正（大阪産業大）
6月6日 代名詞の使い方 金 河合和男（奈良産業大）河原林直人（大阪市立大・
科学言語としての易 武田 院）金 英達（大阪市立大非常勤）呉 宏明（京都
6月20日 詩識について 齋藤 精華大）近藤正巳（近畿大）杉原 達（大阪大）富
唱歌—言語音による伝統音楽の再現・ 山一郎（大阪大）土井浩嗣（神戸大・院）藤永 壮
修得・伝承法 後藤 （大阪産業大）朴 一（大阪市立大）朴 宣美（京
7月4日 進歩，進化，発展といった言葉につい 大・院）松田利彦（神戸商大）松田吉郎（兵庫教育
て—科学の立場から思うこと 加藤 大）山田 敦（学術振興会特別研究員）李 卓（京
周作人から見た「浮世風呂」 深澤 大・研修員）
9月19日 「けころす」考 田中 4月22日 研究班発足にあたって 水野
「聞きなし」を考えるⅡ 小林 5月6日 植民地における治安維持法体制—予防
9月26日 田中旭泉氏の筑前琵琶（於国立文楽劇 拘禁制度を中心に— 水野
場） 全員 台湾大学所蔵旧日本文南洋関係資料につ
報告書について 全員 いて 河原林
12月12日 報告書について 全員 5月20日 台湾工業化と人的資源—台拓三徳砒業
方言世界の言語力 所を中心に— 山田
ゲスト・岐阜大学 佐藤貴裕 昭和戦争期の台湾総督府公文書 近藤
日本の植民地支配—朝鮮と台湾—班長 水野 直樹
日本の植民地支配の歴史に関しては，近年相当の
研究が蓄積されている。しかしながら，植民地支配
の全体像を明らかにするには，解明すべき問題が数
多く残っている。特に，同じ日本の支配を受けてい
た朝鮮と台湾とでは共通点とともに異なる点も多い
が，具体的にはどのような違いがあり，それはなぜ
生じたのか，について充分検討されてこなかった。
本研究においては，植民地支配における朝鮮と台湾
との比較に重点を置くこととしている。また，植民
地政策を日本の政治・経済・社会などとの関係でと
らえることにも注意を払うこととする。支配政策の
決定・遂行の問題は，被支配側の諸要因を検討すべ
きことはいままでのないが，支配の側の諸要因をも
考慮に入れる必要がある。以上の趣旨から，本研究
は日本史・朝鮮史・台湾史の研究者の共同研究とし
て進めることとする。毎回，研究報告とともに，資
料紹介・書評・研究動向などを内容とする副報告を
行なっており，資料・研究状況についての共通の認識を
深める形式をとる。
- 6月3日 台東国語伝習所について 松田(吉)
植民地間の人的交流について 山室
6月17日 「産米増殖計画」期における系統農業
—朝鮮総督府の農政遂行と小作争議
土井
(書評)『工業化の諸類型(2)—韓国の歴
史的経験—』(ソウル，経文社，1996
年) 堀
7月1日 戦前台湾の電気事業計画
北波道子(関西大・院)
(書評)駒込武『植民地帝国日本の文
化統合』(岩波書店，1996年) 安田
10月7日 植民地台湾における輸出産業の転換期
—1930年代の包種茶輸出— 河原林
近年韓国における植民地関係の資料
集刊行について 李
10月21日 朝鮮総督府の「民間信仰」調査 青野
植民地期朝鮮の官吏研究について浅井
11月4日 台湾総督府の東南アジア華僑認識
籠谷
(書評)松本武祝『植民地権力と朝鮮

<p>農民』(社会評論社、1998年) 河合</p> <p>11月18日 濟州島における実力養成運動とその人員構成 藤永</p> <p>倉富勇三郎文書の朝鮮関係資料—1914年の朝鮮総督府官制改定案を中心— 永井</p> <p>12月2日 韓国併合前夜のエジプト警察制度調査 松田(利)</p> <p>国立国会図書館憲政資料室所蔵の植民地関係文書 水野</p> <p>12月16日 差別と平等のはざまで—朝鮮人「皇軍兵士」とアメリカ日系人兵士— フジタニ</p> <p>日本統治下台湾の警察関係刊行物について 宗田昌人(京大・院)</p>	<p>班員 飛鳥井雅道 落合弘樹(以上所内) 青山忠正(仏教大) 奥村 弘(神戸大) 小股憲明(大阪女子大) 勝部真人(広島大) 斉藤祐司(彦根城博物館) 佐藤隆一(青山学院高校) 鈴木祥二(名古屋大) 鈴木栄樹(京都薬大) 谷山正道(天理大) 塚本明(三重大) 原田敬一(仏教大) 母利美和(彦根城博物館) 藪田 貫(関西大) 山崎有恒(立命館大) 岸本 覚(立命館大・院) 三澤 純(広島大・院)</p> <p>1月23日 倒幕をめぐる言説 佐々木克</p> <p>3月6日 1872/73の在米英日本人—「井伊直憲洋行日記」を素材として— 鈴木栄樹</p> <p>5月8日 王政復古の政治構造—岩倉具視意見書を中心に— 羽賀祥二</p> <p>5月22日 薩土盟約と奉還建白をめぐる情報—寺村左膳を中心に— 青山忠正</p> <p>6月12日 警察情報にみる西南戦争期の京都</p>
<p>明治維新期の社会と情報 班長 佐々木 克</p>	<p>落合弘樹</p>
<p>明治維新期は、おおまかに幕末の旧体制崩壊期と、明治の新国家建設期とに二分できる。しかし何れにしろ、変革期であり動乱期である。権力は動揺し、社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説などさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信してゆく。幕府や藩当局は、それぞれ独自の情報蒐集システムを持っていた。しかし伝統のシステムだけでは、新たな状況に対応出来なくなる。また幕府は政治や外交に関しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、独自のネットワークをもって、情報の蒐集・発信主体として登場し、権力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的には、明治期に引き継がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えなければならない情報を、如何に早くかつ広く伝達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自体も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような実態をふまえて、明治維新という変革期における〈情報〉にかかわる諸問題を、総合的に検討してみようと意図しているものである。</p>	<p>6月26日 幕末期の長浜 岸本 覚</p> <p>7月17日 島津久光と新政反対派 佐々木克</p> <p>10月16日 桜とナショナリズム—日清戦争以後のソメイヨシノの植樹— 高木博志</p> <p>10月23日 佐々木克著『大久保利通と明治維新』 羽賀祥二</p> <p>11月13日 高瀬道常と「大日記」 谷山正道</p> <p>12月4日 幕末期井伊政権による水戸風聞探索 佐藤隆一</p> <p>西洋部</p> <p>アヴァンギャルド芸術の研究 班長 宇佐美 齊</p> <p>1997年から2001年にいたる4年間の予定で発足した共同研究班である。</p> <p>20世紀初頭において芸術概念と表現理論とを大きく転換させた、いわゆるアヴァンギャルド芸術を今日的な視点から総合的に再検討することを主眼とする。その場合、文学・美術・音楽・演劇・映画など諸ジャンル相互間の関わり、科学技術の進展、また政治や社会の変動が及ぼした影響、そして思想的なコンテキストなどに留意しなければならないことはもちろんであるが、同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及効果が見られる点を充分に考慮して、西ヨーロッパのみを視野に収めるの</p>

ではなく、日本・中国・ロシア・アメリカ・その他の諸国との比較対照の視点をも重視しなければならないだろう。なお時代区分としては、20世紀初頭から30年代までを取り扱う。研究会は原則として隔週に開催し、口頭発表と討議とを重ねたうえで、最終年度には論文執筆、報告書の刊行を予定している。

班員 井波陵一 大浦康介 ピエール・バイヤール 森本淳生（以上所内）篠原資明 松島 征 三 好郁朗（以上総合人間学部）吉田 城（文学部）鈴木貞美（国際日文研）丹治恆次郎（関西学院大学法学部）ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大学文学部）水田恭平（神戸大学国際文化学部）永田 靖（大阪大学文学部）禹 朋子（帝塚山学院大学文学部）

- 1月19日 即興と偶然性 近藤（ゲスト）
- 2月16日 アヴァンギャルドの逆説—ダダと未来派をめぐって 塚原（ゲスト）
- 3月23日 ブルースとコクトー：飛行の詩学 吉田
- 4月13日 フランス人の俳句観 ジャン・サロッキ（ゲスト）
- 4月27日 記憶よ、語れ。—ベンヤミンと王国維 井波
- 5月11日 内省する小説（家）：ジッドとブルースト 禹
- 5月25日 宣言のディスクール 大浦
- 6月8日 アヴァンギャルドの時間意識 宇佐美
- 6月22日 ヴァレリーと国際連盟知的協力委員会—1920-30年代フランスにおける文学と政治の一考察 森本
- 7月13日 1930年代のアヴァンギャルド 田淵（ゲスト）
- 9月28日 コレージュ・ド・パタフィジック、あるいは言語芸術のアヴァンギャルド 松島
- 10月12日 新しい考えをどのように手にいれるか—ブルトンをめぐって バイヤール
- 10月26日 暴力・神話・法—ベンヤミンの『暴力批判』をめぐって 水田
- 11月16日 詩的言語への反逆—ヴィトゲンシュタインとオーストリアの20世紀文学の状況 国重（ゲスト）

- 12月7日 アヴァンギャルドの空間意識—キュビズムを考える— 丹治
- 12月21日 足穂と20世紀 篠原

主体・自己・情動構築の文化的特質

班長 田中 雅一

今年は研究会も最終年度にあたり、研究成果の出版に向けて会合を開いた。

班員 松田素二（以上文学部）菅原和孝（総合人間学部）速水洋子（東南ア研）栗本英世 田辺繁治 林 勲男（以上民博）青木恵理子（鈴鹿国際大）小田 亮（成城大）春日直樹 富山一郎（以上大阪大）川村邦光（天理大）窪田幸子（広島大）棚瀬慈朗 谷 泰（以上滋賀県立大）中谷哲弥（奈良商科大）中谷文美（岡山大）西井涼子（東京外大）福浦厚子（滋賀大）渡辺公三（立命館大）李 仁子 金谷美和 川村清志 城田 愛（京大・人環・院）鈴木健太郎（東大・院）中谷純江（金沢大・院）

- 1月19日 出版打合わせ 全員
- 2月9日 中谷・窪田・田中論文（『岩波文化人類学講座第4巻—個からする社会展望』所収）についての討論 全員
- 1月13日 政治的抵抗から経済的抵抗へ—スリランカ漁民の場合 田中
- 出稼ぎから定着への戦略とレトリック 李

コミュニケーションの社会史 班長 前川 和也

1995年に発足したこの研究班は、工業化が本格的に進行する以前のヨーロッパ、東アジア、西アジアでの社会的コミュニケーションを議論してきた。文字記録、手紙や新聞、複製あるいは印刷といった情報メディアにかかわる問題、国家あるいは帝国の内外をむすぶ情報ネットワーク、情報と公権力、「公共空間」などが討論の対象であった。1998年1月における2報告によって研究班は一応解散した。現在、報告書のための原稿を準備している。

班員 小山 哲 高田京比子 田中雅一 谷井陽子 富永茂樹 横山俊夫 田中俊夫（以上所内）服部良久 夫馬 進 南川高志（以上文学部）川島昭夫（総合人間学部）川北 稔 江川 温（以上大阪大）井上浩一 大黒俊二（以上大阪市大）河村貞枝

渡辺 伸（以上京都府大）阿河雄二郎（大阪外語大）川本正知（奈良産業大）京楽真帆子（茨城大）合田真史（甲南大）佐々木博光（大阪府大）渋谷聡（鳥取大）森 明子（国立民博）三成美保（摂南大）山辺規子（奈良女子大）脇田晴子（滋賀県立大）

1月13日 中・近世農村社会とコミュニケーション 服部
1月20日 啓蒙期ドイツの読書熱と公論 三成

空間と移動の社会史

班長 前川 和也

この研究班はヨーロッパ、東アジア、西アジアにおける前工業化諸社会でのヒトやモノの移動、情報あるいは制度の移転、伝達、そしてそのような移動や伝達を可能にしたトポスを包括的に議論する。近代以前の歴史をあつかう研究者は、とすれば、対象としている地域社会の自生的、自律的な諸側面を強調してきたけれども、この研究班では、社会境界をこえていった要素、また境界のなかへはいりこんできた力を、できうかぎり強調したい。もっとも閉鎖的な社会でさえも、人々は外部世界についてのなんらかの認識をもっていた。その認識が、結局は社会の閉鎖性をつきくずす思想に結実していったのかもしれない。とりあえず初年度（1998年度）は、旅行記や地図にみられる他者認識、空間認識、また広域世界（たとえば帝国）におけるヒト、モノ、情報の移動、伝達のシステム、国民国家と人間の移住、移民などが論議された。

班員 小山 哲 阪上 孝 高田京比子 田中雅一 谷井陽子 富永茂樹 横山俊夫（以上所内）服部良久 南川高志（以上文学部）川島昭夫（総合人間学部）川北 稔 江川 温（以上大阪大）井上浩一 大黒俊二（以上大阪市大）河村貞枝 橋本伸也 渡辺 伸（以上京都府大）川本正知（奈良産業大）合田真史（甲南大）佐々木博光（大阪府大）渋谷聡（鳥根大）田中俊夫（金沢大）森 明子（国立民博）三成美保（摂南大）山辺規子（奈良女子大）脇田晴子（滋賀県立大）

4月21日 「空間と移動の社会史」で何が可能か 前川

4月28日 ある女医の冒険、あるいは旅行記には何が書かれているか 小山

5月12日 ラスタファールライ ー大西洋を横断する社会宗教運動の展開

石井美保（京大・人環・院）

5月26日 「見たこと」と「聞いたこと」ーマルコ・ポーロの読者たち 大黒

6月2日 外国人とウィーン 森

6月16日 ローマ時代の「海外勤務」 南川

6月23日 聖地巡礼が示唆するものー移動が生み出す市民的アイデンティティのグラデーションの空間 高田

7月7日 国教会伝導教会と西アフリカ

並河葉子（神戸外語大）

9月29日 ジョージア植民と植物移植 川島

10月6日 ルイ14世の治世の政治的意味

Yves-Marie Berc 氏（フランス国立古文書校）

10月13日 14、15世紀イタリア都市の公的空間における女性

Ch. Klapisch-Zuber（フランス高等研究院）

10月27日 鏡としての外部(1)ー啓蒙主義と旅行（記） 阪上

11月10日 移住するガヴェネス 河村

11月17日 帝政期ロシアの学校制度と西欧ーお雇い外国人教師と留学生(1) 橋本

11月24日 ドイツにおける新聞の成立と飛脚制度 渡辺

12月8日 30年戦争におけるある傭兵の足跡渋谷

12月15日 イスラムの空間概念と旅行記 川本

12月22日 「聖年」の誕生 山辺

テキストの政治学ー危機の時代における理論と批評

班長 上野 成利

20世紀の前半期は、近代的な人間諸科学の「危機」が表面化し、その克服をめぐる言説がさまざまな領域で浮上していった時代であった。これらの言説には、近代みずからが自己自身のありようを反省するという、近代の屈折した自己意識の構造が、きわめて先鋭的なかたちで表現されているといっていだらう。しかも、そうしたテキストの自己関係的な構造を押し破るようにして、「危機」の克服を可能にする方向が明示的に語られるとき、そこにはいやおうなくある種のねじれが生じ、場合によってはあからさまなイデオロギーとして機能することにも

なる。こうしたテキストのねじれを解きほぐしながら、それらの言説に刻印された近代的な思考の回路を明らかにし、それが近代社会のありようとどのように絡み合っているのかを検証すること——これが本研究班の基本的なねらいである。具体的には、哲学理論から社会理論、さらには文学・芸術批評にいたるまで、当時「危機」をめぐる日本と欧米で書かれたさまざまな領域のテキストが、われわれの考察の対象となる。初年度にあたる本年は、主として1930年代に日本で書かれた批評に重点を置きながら、検討作業を進めている。

班員 落合弘樹 北垣 徹 小林博行 小牧幸代 高田京比子 瀧井一博 森本淳生 安田敏朗（以上所内）崎山政毅（神戸市外大）辰巳伸知（仏教大）細見和之（大阪府立大）水嶋一憲（大阪産業大）盛田良治（大阪大・院）

4月14日	〈近代の超克〉をめぐる(1)	全員
4月30日	研究会の方向をめぐる	全員
5月12日	〈近代の超克〉をめぐる(2)	全員
5月21日	「サバルタン」概念をめぐる	崎山
6月9日	〈世界史の哲学〉論をめぐる	全員
7月2日	「方言」認識の諸相	安田
7月14日	西田幾多郎の後期哲学について	上野
7月16日	近代日本のナショナリティーの問題について	Kevin M. Doak
9月24日	〈脱・近代〉の言説空間	上野
10月6日	保田與重郎『日本の橋』(1)	全員
10月20日	保田與重郎『日本の橋』(2)	全員
10月22日	フィリピンにおける三木清	盛田
11月17日	F・シュレーゲルのロマン主義について	上野・森本・安田
11月26日	ヴァレリーと「精神の危機」	森本
12月10日	雑誌『コギト』と30年代日本	細見
12月22日	南原繁『フィヒテの政治哲学』	上野

1789年人権宣言成立過程の研究班長 富永 茂樹

この共同研究は「人間と市民の権利の宣言」の成立過程を詳細に辿りつつ、そこにあらわれる市民概念を検討することを目的としている。研究の対象となるテキストは、1789年7月から8月にかけての国民議会での議論、また議会の内外で発表された数多くの人権宣言草案である。昨年度から正式に発足し

たこの研究会は、発足前にすでに非公式なたちで行われてきた読書会での作業を継続しており、さしあたり主な草案を選定し、その精確な翻訳を作成する作業にあたっている。作業の手順は、前もって班員の一名が下訳を作成し、研究会では別の一名がそれを批判的に検討して、班員全員で最終的な訳文を決定するというものである。当初の予定にさらに翻訳すべきテキストを追加したが、その分もふくめて現在のところ約四分の三の翻訳が完了している。

班員 阪上 孝 北垣 徹（以上所内）前川真行（大阪女子大）白鳥義彦（名古屋大）宇城輝人 岡崎宏樹（以上京大研修員）佐藤嘉幸（京大・経済・院）

1月19日	シネティ案	佐藤／宇城
1月26日	ベッカーリアのユスティティア	石井
2月9日	佐藤論文合評会	全員
2月23日	ラフォン・ド・ラデバ案	北垣／佐藤
3月9日	ラフォン・ド・ラデバ案	北垣／佐藤
3月26—28日	シエース第二案・トレ案	
		宇城／佐藤
		宇城／前川
4月10日	グージュ・カルトゥー案	北垣／白鳥
4月17日	Le nomadisme postmoderne	
		M. Maffesoli
5月1日	グージュ・カルトゥー案	北垣／白鳥
5月15日	グージュ・カルトゥー案	北垣／白鳥
6月5日	グージュ・カルトゥー案	北垣／白鳥
6月19日	ボワランドリー案	白鳥／岡崎
7月3日	ボワランドリー案	白鳥／岡崎
7月17日	ボワランドリー案	白鳥／岡崎
9月11日	アヴァレー案	岡崎／北垣
9月18日	テルム案	北垣／古村
10月2日	ペティオン案	北垣／富永
10月16日	ブリッソー案	白鳥／富永
10月30日	ヴァルテル案	古村／白鳥
11月6日	ヴァルテル案	古村／白鳥
11月20日	近代国民国家の人権宣言批判の可能性について	石埼
12月4日	ヴァルテル案	古村／白鳥
12月18日	ブーシュ案	富永／前川
12月25日	ブーシュ案	富永／前川

インド文化史の諸問題—古代インド王権とその周辺—

班長 井狩 彌介

政治権力と宗教権威との関係は、世界の各文明地域においてそれぞれ独自の様相をもって展開し、その文明の基本性格と密接に結びついている。古代インドにおいてこの問題は、権力の中心に立つ王と、正統な宗教儀礼伝承を独占するブラーマン知識階級との関係に典型的に現われる。本研究では、本来は独立した文献群として発生した「法典」と「王権政略論」が次第に相互影響を及ぼしつつ歴史的に交差して行く過程を焦点に据える新たな視角から、インド学各分野の専門研究者の協力のもとに、権力と権威との関係構造とその歴史的展開の考察をはかる。叙事詩『マハーバータ』の「ラージャダルマ（王法）」章（XII. 1-128）に焦点をあて、隔週に行われる研究会ではテキストの会読形式を中心として研究が進められてきた。本年度において主要部分の検討を終え、叙事詩にあらわれる王権の諸側面についての研究班で扱った資料のまとめと研究報告論文集の作成をおこなう予定である。

班員 荒牧典俊 藤井正人 船山 徹 村上昌孝（非）山下 勤（非）（以上所内）徳永宗雄 御牧克己（以上文学部）赤松明彦（九州大）永ノ尾信悟 土田龍太郎（以上東京大）榎本文雄 井上信生（以上大阪大）狩野 恭（神戸女子大）黒田泰司 八木 徹（以上大阪学院大）後藤敏文（東北大）後藤純子（大阪市立大）島 岩（金沢大）正信公章（追手門学院大）高島 淳（東京外大）中谷英明（神戸学院大）林 隆夫（同志社大）引田弘道（愛知学院大）増田良介（大阪外大・非）松田佑子（京都産大・非）矢野道雄（京都産大）渡瀬信之（東海大）乙川文英 梶原三恵子（日本学術振興会）野田智子 村川章子（以上京大・文・院）杉田瑞枝（京大研修員）

近代社会における研究者の組織化—研究所・学会・学派—

班長 阪上 孝

専門的な国際学会や研究所の設立は19世紀後半に特徴的な現象である。このような研究者の組織化を促した社会的な条件は、国家と科学の緊密な結びつき、「科学国家」ともいうべき国家のあり方が支配

的になったことにある。科学に内在する条件についていえば、一つは学問の専門分化が学際的な研究の総合の必要を呼び起こしたこと、もう一つは大量的な観察、調査、比較などが科学研究の中心的な技法になったことであろう。いわば、「知識の社会化」と並行するかたちで「科学国家」化（社会の科学化）が進行していったのである。このように科学と社会とが交差する場面を、研究所や学会についての具体的な研究をつうじて解明していくこと、ここに本研究班のねらいがある。4年間にわたって行ってきた本研究班も最終年度を終え、現在、報告書の刊行をめざして班員各自が論文執筆を進めている。

班員 上野成利 大浦康介 北垣 徹 瀧井一博 田中雅一 富永茂樹（以上所内）川島昭夫（総合人間学部）宇城輝人（京大研修員）上山隆大（上智大）川越 修（同志社大）小林清一（滋賀県立大）崎山政毅 光永雅明（以上神戸市外大）富山一郎 山中浩司（以上大阪大）中岡哲郎（大阪経済大）西川長夫 渡辺公三（以上立命館大）前川真行（大阪女子大）水嶋一憲（大阪産業大）牟田和恵（甲南女子大）

1月30日 共和制の構築と考古学・人類学の動員
—M・ガミオとメキシコ革命— 崎山
3月20日 報告書作成の方向をめぐって 全員

進化論を読む

班長 阪上 孝

ダーウィン『種の起源』の刊行以来、〈進化論〉は人文・社会科学の領域にまで大きな影響を与え、近代科学全般にパラダイム・シフトをもたらした。その影響の大きさは、「生存闘争」や「適者生存」といった用語の普及のうちに端的に見て取れるだろうが、しかし進化論的な思考様式は、そうした表層的な次元だけでなく、19世紀後半以降の社会と学問の枠組みに深く根を下ろしているというべきだろう。〈進化論〉がさまざまな社会と学問分野でどのように理解され、受容され、批判されていったのかを比較検討することで、近現代の知識と社会のありかたは、その問題性もふくめて明らかになるにちがいない。こうして本研究班では、「進化論と社会」を主題とする本格的な共同研究の準備段階として、まずは「進化論を読む」ことに重点をおくことにした。現在、基本的なテキストを読み進めながら、〈進化

論)の問題構制をめぐって討議を重ねている。

班員 上野成利 北垣 徹 小林博行 小山 哲
武田時昌 田中雅一 富永茂樹 山室信一(以上所
内)伊藤和行(文学部)大澤真幸(人間・環境学研
究科)大東祥孝(留学生センター)八木紀一郎(経
済学部)宇城輝人(京大研修員)川越 修(同志社
大)小林清一(滋賀県立大)齊藤 光(京都精華
大)佐倉 統(横浜国大)白鳥義彦(名古屋大)姫
野順一(長崎大)前川真行(大阪女子大)光永雅明
(神戸市外大)

3月5日	研究会の方向について	所内全員
4月24日	進化論の「基本概念」ノート	武田
5月22日	ダーウィン『種の起源』(1)	小林
6月12日	ダーウィン『種の起源』(2)	北垣
6月26日	ダーウィン『人間の由来』	上野
9月25日	ラマルク『動物哲学』	宇城

10月9日	マルサス『人口論』	八木
10月23日	スペンサー『生物学原理』	光永
11月13日	ヘッケル『自然創造史』他	小山
11月13日	今西進化論の成立とその位置	
	ゲスト・滋賀県立大	谷 泰
12月11日	ハクスリー『進化と倫理』	阪上

東 方 部

唐宋美術の研究 班長 曾布川 寛

1995年4月から5ヶ年計画で始まった本研究は、
隋・唐・五代・北宋の美術全般についてより精確な
理解を目指す。特に繁栄の極に達した盛唐美術を中
心に、初唐からそこに至った過程、またそこから一
転して写実的な山水・花鳥画に代表される宋代美術
を生むに至った背景などを探る。具体的な方法とし
ては出土・伝世の文物、石窟寺院の仏教美術、画
論・書論の芸術論を三本の柱として、発表と会読を
交えて進めていく。本年の芸術論の会読は劉道醇
『五代名画補遺』(河野道房担当)、黄伯思『東觀余
論』(下野健児担当)を取り上げた。

訳経僧伝研究 班長 桑山 正進

訳経僧とは、インドや中央アジアから中国にやっ
てきて、經典漢訳に参画した仏教僧である。かれら

に関する情報は『高僧伝』『続高僧伝』『宋高僧伝』
などに編纂されている。これらの伝記を班員の専門
分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視点をも
って読解検討し、4世紀—8世紀の、中央アジア
から南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他お
おきの情報を引き出すことを目的とする。あわせて
扱ふべき現代語訳を作成する。研究会は1996年4月
から2001年3月まで隔週の月曜日(2時—5時)に
文献センター会議室で開催。

中国音韻史の研究 班長 高田 時雄

本研究班は一般の書目には著録されることの稀な
明清の韻学関係の書物を取り上げ、序跋や凡例を読
みつつ、その資料的性格を闡明し、明清の音韻史を
辿ろうとするものである。1998年3月で終了、研究
成果として論文集『中国近世の音韻学』を編集集中。

16・17世紀アジアにおける言語接触

班長 高田 時雄

本研究班ではポルトガル勢力のアジア東漸を契機
として起こった言語接触の諸相を、ジェズイットを
初めとするカトリック諸会派の資料を中心として解
明することを目指す。また研究報告と並行して1593
年マニラ版タガログ語ドチリナの会読を行いつつあ
る。

中国技術の伝統 班長 田中 淡

「中国技術史の研究」に引き続いて、1996年から
5年間の計画で、中国技術の伝統と特質について検
討を加えてゆく。基本的には生活科学技術を中心と
するが、しかし前研究班の過程で臚げながらみえて
きた中国技術史における研究課題は、特定の時代、
分野に偏重しない。一般的には、技術と科学の相関、
技術者と社会、生活科学の特質、少数民族の技術、
等々の主題に関わるであろうし、個別的には、農業、
医学、土木建築、紡績、数学、天文学、化学、その
他の領域に拡がるであろう。会読のテキストとして
は、引き続いて元・王禎の『農書』農器図譜の訳注
作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野に
わたる班員の研究発表を随時おこなう。

中国の礼制と礼学

班長 小南 一郎

当研究班では、周礼春官部分を賈公彦疏で読み、本文と鄭玄注を翻訳し注釈を作る仕事を進めて来たが、本年度中に春官部分を読み終わった。引き続き、続漢書の礼儀志を読み、訳注を付けている。正史の礼儀志に記される儀礼が、国家や天子の存在意義とどのように結びついていたのか、具体的な儀礼の細節の復元作業と関連させつつ、考えようと努めている。

唐代宗教の研究

班長 吉川 忠夫

『北山録』の会読は7月をもっていったん中断し、9月以降、下記の研究発表を行った。

- 9月16日 唐代律文献に見える梁僧祐『薩婆多師資伝』 船山 徹
- 9月30日 賈大隱の『老子述義』 古勝 隆一
『北山録』の立場と「南宗禅」以前の南宗禅をめぐって 荒牧 典俊
- 10月14日 唐代における三階教徒一石刻史料を手掛かりとして一 愛宕 元
- 10月28日 『太上老君説常清静経』をめぐる二三の問題—唐杜光庭注を中心に— 麥谷 邦夫
- 11月11日 敦煌『劉家太子伝』と賓頭盧・弥勒信仰 金 文京
唐代巴蜀における仏教と道教 吉川 忠夫
- 11月25日 白履忠（渠丘子）の『黄庭経』解釈をめぐって 垣内 智之
- 12月9日 十王経と死者の祭祀 小南 一郎

周氏冥通記研究

班長 麥谷 邦夫

本研究班は、吉川忠夫教授を班長とする「六朝道教の研究」研究班による『真誥』訳注作業の終了を承け、同じく梁陶弘景の編纂になる『周氏冥通記』四巻の訳注作成を主目的として、1998年度より2年間の予定で活動を開始した。本書の訳注作成作業を通じて、六朝時期の茅山における上清派道教の動きやその思想信仰の特質がより明かになることが期待される。本年度は第一巻を読了した。

文献と情報

班長 勝村 哲也

研究方法と状況は昨年と変りがない。ただ書庫の改修工事が終了したので、文献研究を再開できるようになった。建仁寺両足院の調査は尾崎、牧野が担当しほぼ収束した。琉球の調査と併せて、一部の画像のCD-ROM版による公開を予定している。対馬は勝村が継続して調査を進めている。情報班は、11月14、15両日、カリフォルニア大学バークレイ校よりルイス・ランカスター教授とハウエイ・ラン氏、台湾、中央研究院より謝清俊、国立政治大学より謝瀛春の両教授、韓国より、ソウル大学の宋基中、民族大学の金興圭、東国大学のリー・ヨンクウ教授の参加を得、東洋大学チャールス・ミュラー教授を座長として研究会をもった。ここでは漢字文献の国際的利用、情報の収集及びトランスミッションに関連する問題等について協議した。丹羽、桶谷等が報告した。

辺境出土木簡の研究

班長 富谷 至

3年計画の第3年次に当たる今年度は、昨年度に引き続き『敦煌漢簡』の会読を行うと同時に、会読の成果を踏まえた班員各位の研究発表を行い、相互に批判・検討する中で簡牘資料に対する文書学的・歴史学的な理解を深めあった。また2月20日には中央大学の池田雄一教授をお招きし、「木竹簡・帛書を利用した小文をめぐって」と題する講演を伺った。

中国共産主義と日本—思想・運動・戦争—

班長 狭間 直樹

現在の中国が中国共産党の支配する「共産主義」の国家としての中華人民共和国であることは、明白な事実である。中国近代史の一つの帰結としてこの中華人民共和国の誕生にいたる経過を振り返るには、二十世紀において独特の歴史現象として出現した世界の共産主義との関連でとらえねばならぬことは言うまでもないとして、そのさい東アジアにおける日本（朝鮮を含め）との密接なかかわりの探求がとりわけ必要とされるのである。本研究は、中国共産主義のありようを日本との関連において、思想・運動・戦争の諸側面から迫ろうとするものである。

中国近代の都市と農村

班長 森 時彦

都市と農村の関係を主軸にロングスパンで中国近代史を縦断的にとらえなおし、前近代から現代にかけての中国の社会変動を巨視的に分析する視座の形成を目指して1993年にスタートした本研究班は、本年3月をもって終了した。この5年の間に行われた報告は70以上の多くを数える。今年度は報告論文集に掲載予定の論文草稿を班員全員で詳細に検討することにほとんどの時間を費した。そのエッセンスは15篇ほどの論文集として公刊の予定である。

中国近代化の動態構造

班長 森 時彦

近代における中国文明と西洋文明の接触が中国の社会構造にいかなる変動をもたらしたかという問題を、政治・経済・文化などさまざまな専門分野から多角的に考察することが、このプロジェクトの課題である。その際、従来はともすれば西洋近代が中国の伝統社会にあたえた衝撃を一方向的に分析する傾向が多くみられたが、この共同研究ではむしろ中国在来の社会構造が西洋文明の受容にあたってどのように規定要因として作用したか、そしてそれが中国の近代化においていかに機能したかという側面にも注意をはらいながら双方向の分析をすすめる。現在の見通しでは、1920年代をはさむ時期の長江デルタと珠江デルタに問題の核心があるように思われる。

北朝後半期仏教思想史研究

班長 荒牧 典俊

5年の計画でスタートした本研究班は、1999年3月を以て終了する。北朝後半期仏教思想史の実物資料である敦煌写本を解読し校定し、それらを中心にすえて、いままでほとんど解明されていなかった、この時期の仏教思想史の根幹の動きを解明し、以て隋唐の禪思想史の起源・展開へとつなげていく、という当初の目的は、かろうじて達成したのではないかと考える。しかし反省すべき点も、多い。敦煌写本を解読し校定するという仕事が、意外に大変で、それだけに時間をとられ、それらに文献学的・思想的な注釈を加えることができなかった(写本校定の仕事を、あらかじめすませておいて、共同研究をはじめた方がよかった)。この時期の仏教思想史の根幹の動きが解明されていないからこそ、本研究班を構想したのであるが、そしてかろうじて解明し得

たのではないかと考えるが、そのような仏教思想史の根幹の動きをふまえて、儒教、道教、美術史、華嚴・天台・禪思想などを御専門の班員の方々と、共同研究するという「共同」の実には及び難かった(あらかじめ仏教思想史の根幹の動きを解明しておいて、それを共有財産として出発した方がよかった)等々。しかし、ともかく多様な専門の班員15名の方々に執筆していただいて成果報告書『北朝隋唐中国仏教思想史』を刊行すべく、文部省の「研究成果公開促進費」を申請し、1999年度内には出版する予定である。

最終年度である本年度は、成果報告書に執筆予定論文の予備発表を中心に共同研究会を運営した。

客 員 部 門

植民地主義と人類学

班長 山路 勝彦

人類学とその周辺諸科学の発展は、西欧による非西欧地域への政治・経済的進出と密接に結びついてきた。しかし、それは単純に人類学が植民地支配の道具であった、ということの意味しているのではない。また日本と東アジアを中心とする、植民地支配も多くの複雑な問題を含んでいる。こうした問いかけに答えるために当研究会が組織された。2年目は1回に2名の報告という形で各自の問題意識を語ることで、情報と問題群の共有に努めた。

班員 田中雅一 水野直樹 安田敏朗 山室信一 山本有造 タカシ・フジタニ(以上所内) 田辺明生(AA研究科) 松田素二 米山リサ(以上文学部) 江口信清(立命館大) 荻野昌弘(関西学院大) 奥野克己 細谷広美(以上京都文教大) 春日直樹 富山一郎(以上大阪大) 窪田幸子(広島大) 栗本英世 李 仁子(民博) 小林致広(神戸市外大) 小松和彦(国際日文研) 高岡弘幸(高知女子大) 福浦厚子(滋賀大) 元木淳子(大阪外大) 森木和美(薫英女子大) 安井真奈美(天理大) 脇村孝平(大阪市大) 金谷美和 常田夕美子(以上学術振興会) 池亀 彩 石井美保(以上京大・人環・院)

1月12日 植民地の記憶―パラオをめぐるさまざまな語りから 安井真奈美
日本人への道一皇民化政策下の台湾と
蕃童教育所の子供たち 山路勝彦

- | | | |
|--------|---|---|
| 1月19日 | 韓国の風水思想と植民地主義 崔吉城
英領シンガポール期における華人の社会結合 福浦厚子 | 心に 小林致広
アノフェレス・ファクターとヒューマン・ファクター —英領インドにおけるマラリア対策 脇村孝平 |
| 1月26日 | 『北槎閑略』に見られるロシア・シベリア理解について Margarita Winkel | 11月16日 日露戦争以降における日本人の『満州』観光(戦前編) 高 媛
植民地ディアスポラと批判的多文化主義の実践—家族・人種・セクシュアリティ—と柳美里の「揺れ」 米山リサ |
| 2月16日 | メラネシアのカスタム概念をめぐって 吉岡雅徳
植民地から社会主義へ—ベトナム北部紅河デルタ農村の経験 高岡弘幸 | 12月7日 記憶の植民地化—ペルーにおけるヘンティレス(異教徒)神話とインカリ(インカ王)神話を手がかりとして 細谷広美 |
| 3月16日 | 〈アジア〉のアイデンティティと自由主義 岡本仁宏
『キメラ』その後 山室信一 | 西ケニア山村からみた大英帝国 松田素二 |
| 4月6日 | 山本真鳥『文化』(新曜社 山本・山下晋司編)を編集して
コメンテーター 窪田, 安井, 岡田 | |
| 4月20日 | エヴァンズ=プリチャードに語られなかった神話—アニュー人にとっての“モダニティ” 栗本英世
儀礼的暴力の改革—インドのフックスインギングとスリランカの動物供犠 田中雅一 | |
| 5月18日 | 『民族を展示する』 荻野昌弘
制度としての文化財と博物館吉田憲司 | 一九世紀における明治維新 佐々木 克
「日本植民地帝国」の経済史的研究 山本 有造 |
| 6月1日 | 労働力という経験—永丘智太郎と安里延 富山一郎
植民地主義と家父長制—「内鮮結婚」関連資料からみる家父長制 森木和美 | 前近代日本の文明史的研究 横山 俊夫
近代東アジアにおける日本の法と政治 山室 信一 |
| 6月15日 | 梁山泊の人類学, それとも?—台北帝国大学土俗・人種学研究室 山路勝彦
植民地主義と民族学—西北研究所の歴史的意義 中生勝美 | 近代朝鮮の政治と社会 水野 直樹
戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク 籠谷 直人 |
| 7月6日 | 「抵抗論」の魅力に抗して—トリニダード・トバゴのスピリチュアル・バプティストの儀礼から 大杉高司
植民地的「公共領域」と共同体—インド・オリッサの事例から 田辺明生 | 近代天皇制の文化史的研究 高木 博志
土族の研究 落合 弘樹
ドイツ国家学と近代日本 瀧井 一博 |
| 10月5日 | 帝国・ジェンダー・国民化—朝鮮人兵士と「男の絆」 T. Fujitani
韓国親族研究における両班モデルと実態モデル 岡田浩樹 | 近代日本の言語政策 安田 敏朗
江戸時代天文暦学の文化史的研究 小林 博行 |
| 10月19日 | 先住民族自治は国内植民地の再生か?—サンアンドレス合意以降の論争を中 | |

Ⅱ 個人研究

日 本 部

西 洋 部

人 文 学 報

文学理論の研究 大浦 康介
後期ヴェーダ文献の成立史研究—ブラーフマナから
ウパニシャッドへ— 藤井 正人
初期近代ポーランドの政治文化 小山 哲
フランクフルト学派の政治思想 上野 成利
中世イタリアの「家」 高田京比子
共和国の法と道徳—フランス第三共和政期における
共和思想と新カント派— 北垣 徹
ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思想
南アジア・ムスリム社会の社会構造 森本 淳生
小牧 幸代

東 方 部

六朝隋唐精神史 吉川 忠夫
中国近代社会思想研究 狭間 直樹
南アジア亜大陸北西地方の歴史考古学研究
桑山 正進
中国古代の伝承文化研究 小南 一郎
原始仏教起源論 荒牧 典俊
中国美術の様式と意味 布川 寛
中国建築の様式・技術・空間 田中 淡
近代中国の綿紡織業 森 時彦
道教思想研究 谷 邦夫
敦煌写本の言語史的研究 高田 時雄
新漢字コード系の構築 勝村 哲也
中国古代中世の法制 富谷 至
先秦時代の金文 浅原 達郎
中国の小説、演劇及び講唱文学の演変 金 文京
清代の文化と社会 井波 陵一
古代中国の考古学研究 岡村 秀典
中国科学の基礎理論 武田 時昌
近世中国の財政と社会 岩井 茂樹
インド・中国における唯識仏教の基盤と背景 船山 徹
明清時代の官僚制度 谷井 陽子
中国中世學術史の研究 木島 史雄
中国小学史 森賀 一恵
中国仏教美術の研究 稲本 泰生
前近代朝鮮の政治制度と社会制度 矢木 毅
海派小説研究 濱田 麻矢
ムガル朝時代の歴史叙述の研究 眞下 裕之

中国近代の社会・文化構造 高嶋 航
中国隋唐期における疾病認識—『諸病原候論』を軸
に— 東郷 俊宏
魏晉南北朝時代の注釈学 古勝 隆一

事 業 概 況

夏期公開講座

1998年7月 於 本館大会議室
モノとしての書物
10日 古代メソポタミアの粘土板 前川 和也
古代中国の木簡—紙より優れた書写材料—
富谷 至
『百万塔陀羅尼』の語るところ 勝村 哲也
11日 中国古典籍のブックデザイン 木島 史雄
日用百科の使われかた—十九世紀の日本—
横山 俊夫
印刷文化と手稿（マニユスクリ）—ヴァレ
リーをめぐる— 森本 淳生

開所69周年記念公開講演会

1998年11月5日 於 本館大会議室
ト辞の法表現 森賀 一恵
軍事共同社会の文化人類学—宗教とジェンダー
田中 雅一
徳川慶喜と戊辰戦争 佐々木 克

研究成果の刊行

I 紀 要

人文学報 第81号

日蘭会商（1934年6月—38年初頭）の歴史的意義—
オランダの帝国主義的アジア秩序と日本の協調外交
— 籠谷 直人
明治三年における吉岡使節団の朝鮮派遣と第一次宗
重正起用渡韓運動 沈 箕載
ひとはなぜ自分自身のテキストが読めないのか—テ
クストの一般性にかんする受容理論的考察
大浦 康介
道徳の共和国—ジュール・バルニと新カント派の政

治思想
歴史主義の徴候のなかの文化諸科学
谷泰教授略歴・著作目録
飛鳥井雅道教授略歴・著作目録
彙報（1997年1月～1997年12月）

東方学報 第70冊

明堂泛論—明堂の考古学研究 楊 鴻勳
干宝「搜神記」の編纂（下） 小南 一郎
『目連問戒律中五百輕重事』の原形と変遷 船山 徹
高麗における軍令権の構造とその変質 矢木 毅
梁啓超と宗教問題
Bastid-bruguière, Marianne（巴斯蒂）
北齊禪觀窟の図像考—従小南海石窟到響堂山石窟 顔 娟英
アジャンター第九窟・第十窟壁画—制作年代の問題
を中心に— 定金 計次
アウグストゥス霊廟と大ストゥーパー車輪状構造の
由来— 桑山 正進
『真誥』訳注稿(三) 「六朝道教の研究」研究班
梅原郁教授著作目録
彙報（1997年1月～1997年12月）

ZINBUN（欧文紀要）No. 32

Atsuo MORIMOTO, Genèse du sujet — Les premiers
Cahiers de Valéry et les idées contemporaines
—
Shigeki TOMINAGA, Conversation and Debate —
Transformation of Sociability in Late
Eighteenth-Century France —
Institute for Research in Humanities, Staff and
Seminars 1997

Ⅱ 研究報告その他

中国技術史の研究 田中 淡編
1998年2月10日刊
京都大学人文科学研究所調査報告 第38号
日用百科型節用集の使われかた—地小口手沢相の

電算画像処理による使用類型析出の試み—

横山俊夫・小島三弘・杉田繁治
1998年5月31日刊
京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊 第1号
国際シンポジウム 日本・中国・朝鮮間の相互認
識と誤解の表象 討議集 山室信一編

1998年12月25日刊
平成九年度教育改善推進費（学長裁量経費）研究報
告書 新発見事物への名づけをめぐる学内共同の
ころみ（代表 山本有造）

1998年3月31日刊
所報人文 第44号
1998年3月31日刊
東洋学文献類目 1995年度

附属東洋学文献センター編
1998年2月27日刊
東洋学文献類目 1995年度
補遺版附属東洋学文献センター編
1998年3月13日刊

所 員 動 静

- ・飛鳥井雅道教授（日本部）は、停年退官（3月31日付）京都大学名誉教授の称号を授与（4月1日付）。
- ・横山俊夫助教授（日本部）は、教授に昇任（4月1日付）。
- ・勝村哲也助教授（附属東洋学文献センター）は、教授に昇任（4月1日付）。
- ・山路勝彦関西学院大学教授は、併任教授（比較文化研究部門、4月1日～1999年3月31日）。
- ・高木博志北海道大学助教授は、当研究所助教授（日本部）に転任（4月1日付）。
- ・東郷俊宏氏を助手（東方部）に採用（4月1日付）。
- ・小牧幸代氏を助手（西洋部）に採用（4月1日付）。
- ・古勝隆一氏を助手（東方部）に採用（4月1日付）。
- ・山室信一助教授（日本部）は、教授に昇任（5月1日付）。
- ・塚本 明三重大学助教授は、併任助教授（比較文

- 化研究部門、5月1日～1999年3月31日)。
- ・船山 徹助手(東方部)は、九州大学文学部助教に昇任(10月1日付)。
 - ・田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科学研究費補助金により、1997年12月26日大阪発、マドラス大学に於いて巡礼資料の収集、アンナマライ大学に於いて寺院祭の調査、ハワイ大学、ヒロ周辺に於いてハワイからインドへの巡礼者の調査を行い、1月23日帰国。
 - ・高嶋 航助手(東方部)は、1月9日大阪発、南京博物館、中国社会科学院歴史研究所に於いて文献資料の収集を行い、1月23日帰国。
 - ・瀧井一博助手(日本部)は、1997年3月28日大阪発、ウィーン大学に於いてオーストリアにおける国家学思想の展開と日本への影響についての研究を行い、1月28日帰国。
 - ・高田時雄教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、2月14日大阪発、北京大学に於いて古典学に関するレビューを受け、2月18日帰国。
 - ・藤井正人助教授(西洋部)は、在外研究員旅費により、1月10日大阪発、ハーヴァード大学、ヘルシンキ大学に於いてヴェーダ・テキストの生成と転移に関する先端研究の動向調査と研究協力、ユトレヒト大学図書館に於いてカーラント博士の資料とデータの点検を行い、3月9日帰国。
 - ・岡村秀典助教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、2月26日大阪発、河南省文物考古研究所、焦作市文物考古工作隊、北京大学、中国国家文物局に於いて考古学的調査を行い、3月14日帰国。
 - ・富谷 至助教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、3月2日大阪発、オランダ国立博物館、スウェーデン国立民族学博物館、大英博物館に於いて中央アジア出土考古文物の調査を行い、3月15日帰国。
 - ・木島史雄助手(東方部)は、3月9日成田発、フランス国立図書館、大英図書館、大英博物館、オックスフォード大学、ボドレイアン図書館、ロンドン大学、デビットコレクションに於いて敦煌文書及び書物史研究のための西洋古典籍研究を行い、3月25日帰国。
 - ・井狩彌介教授(西洋部)は、3月16日大阪発、ハーヴァード大学に於いて研究交流の打合せを行い、3月25日帰国。
 - ・高田時雄教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、3月17日大阪発、ローマ国立図書館、パレルモ市立図書館、キヨソネ博物館に於いて漢籍調査を行い、3月30日帰国。
 - ・麥谷邦夫教授(東方部)は、3月25日大阪発、ライデン大学に於いて貝原益軒シンポジウム及び資料収集を行い、4月1日帰国。
 - ・荒牧典俊教授(東方部)は、2月9日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて Numata Visiting Professor として研究及び講演を行い、5月10日帰国。
 - ・森本淳生助手(西洋部)は、4月22日大阪発、フランス学士院図書館、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーに関する研究及び資料収集を行い、5月10日帰国。
 - ・田中 淡教授(東方部)は、5月5日大阪発、大明宮含元殿遺跡に於いて同遺跡保存整備に関する日中専門家会議に出席し、5月10日帰国。
 - ・小南一郎教授(東方部)は、5月6日大阪発、西ミシガン州立大学に於いて第33回中世学国際会議に参加し、5月12日帰国。
 - ・狭間直樹教授(東方部)は、5月14日大阪発、香港中文大学に於いて戊戌維新運動史国際学術研討会に参加及び研究資料収集を行い、5月18日帰国。
 - ・勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、文部省科学研究費補助金により、5月15日大阪発、中央研究院史料研究所に於いて新漢字コード系の研究を行い、5月19日帰国。
 - ・麥谷邦夫教授(東方部)は、5月18日大阪発、北京図書館に於いて資料収集、北京飯店に於いて「宗教と科学による文化交流」シンポジウムに出席し、5月24日帰国。
 - ・富永茂樹助教授(西洋部)は、在外研究員旅費により、5月26日大阪発、パリ第8大学に於いて COV&R 年次大会に参加及び研究報告、フランス国立図書館に於いて資料収集を行い、6月5日帰国。
 - ・船山 徹助手(東方部)は、5月8日大阪発、ウィーン大学チベット学仏教学研究所に於いてインド仏教哲学の研究を行い、6月9日帰国。

- ・森賀一恵助手（附属東洋学文献センター）は、1997年8月26日大阪発、北京大学中文系に於いて古代中国語に関する研究を行い、7月15日帰国。
- ・矢木 毅助手（東方部）は、2月16日大阪発、慶北大学校師範大学に於いて朝鮮初期刑罰制度の研究を行い、8月15日帰国。
- ・前川和也教授（西洋部）は、7月13日大阪発、大英博物館に於いて館蔵シュメール粘土板文書の研究を行い、8月17日帰国。
- ・岩井茂樹助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月10日大阪発、上海図書館に於いて資料調査、光明大酒店に於いて研究報告及び学術調査を行い、8月21日帰国。
- ・田中 淡教授（東方部）は、8月16日大阪発、香山飯店に於いて第一回中国建築史国際研討会に参加し、8月22日帰国。
- ・田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、7月30日大阪発、シンガポール国立大学に於いてインド系移民の調査、ハワイ大学に於いてヒンドゥー僧院の調査、ブリティッシュコロンビア大学、トロント大学に於いてインド移民の調査を行い、8月26日帰国。
- ・狭間直樹教授（東方部）は、8月19日大阪発、北京大学に於いて戊戌維新一百周年国際学術討論会に参加及び研究資料収集を行い、8月26日帰国。
- ・勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、9月4日大阪発、サンフランシスコ大学リッチー研究所に於いて新漢字コードのジョイント研究を行い、9月11日帰国。
- ・小山 哲助教授（西洋部）は、8月30日大阪発、ポーランド国立図書館に於いて近世ポーランドにおける情報流通に関する史料調査を行い、9月13日帰国。
- ・狭間直樹教授（東方部）は、9月8日大阪発、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に於いて「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大学バークレー校に於いて、資料収集を行い、9月17日帰国。
- ・森 時彦教授（東方部）は、9月5日大阪発、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に於いて「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大学バークレー校に於いて、資料収集を行い、9月18日帰国。
- ・水野直樹助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、9月11日成田発、ロシア現代史文書保管研究センターに於いてソ連共産党・コミンテルン朝鮮関係文書の調査を行い、9月21日帰国。
- ・金 文京助教授（東方部）は、9月15日大阪発、北京師範大学古籍研究所に於いて国際元代文化学術研討会に出席、北京図書館に於いて資料収集を行い、9月22日帰国。
- ・宇佐美 齊教授（西洋部）は、9月1日大阪発、ボンビドゥー・ドゥーセ文学図書館に於いてアヴァンギャルド芸術研究に関わる調査及び資料収集、トゥールーズ・ル・ミライユ大学に於いて日仏比較近代詩研究に関わる研究集会に参加し、9月23日帰国。
- ・高田京比子助手（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、9月8日大阪発、バドヴァ大学に於いて中世ヴェネツィア史についてレビューを受け、9月23日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、9月13日大阪発、河南省文物考古研究所に於いて焦作府城遺跡の調査、北京大学に於いて調査打合せを行い、9月26日帰国。
- ・富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、9月23日大阪発、大英図書館、スウェーデン国立民族学博物館、デンマーク国立博物館に於いて楼蘭ニヤ出土文書の調査及び研究打合せを行い、10月3日帰国。
- ・谷井陽子助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月18日大阪発、社会科学院歴史研究所に於いて明清時代档案資料収集を行い、10月24日帰国。
- ・横山俊夫教授（日本部）は、学長裁量経費により、10月30日大阪発、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に於いて国際シンポジウム「人文学の新時代」準備会議に出席し、11月9日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月15日大阪発、焦作市文物考古工作隊、北京大学に於いて焦作市府城遺跡の発掘調査を行い、11月17日帰国。
- ・田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費

補助金により、11月8日大阪発、トロント市内に於いて国際学術研究「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究」の調査を行い、11月18日帰国。

・籠谷直人助教授（日本部）は、11月15日大阪発、台湾中央研究院台湾史研究所準備室に於いて第11回太平洋国際科学会議で報告を行い、11月19日帰国。

・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月22日大阪発、香港中文大学に於いて南中国近隣地区古文化研究国際学術会議に

出席し、畜産と動物犠牲の考古学研究のレビューを受け、11月25日帰国。

・高嶋航助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、12月8日大阪発、北京大学、河北省档案馆、上海図書館に於いて清代の人口資料及び中国近代社会史関連の資料収集を行い、12月27日帰国。

・小南一郎教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、12月19日大阪発、湖南省文物考古研究所、城頭山遺跡に於いて中国新石器時代の都城遺跡の調査を行い、12月27日帰国。